



芭蕉翁
 笈の小文
 全



5
 1808





芭蕉の
竹島の
中
又

乃たに... 衆多... 乙州之... 今... 祈... 皆... 後... 江州... 磯上... 觀... 佳... 硤... 石子... 宝... 永... 四... 丁... 亥... 歲... 春... 乙... 州... 之... 因... 殷... 末... 不... 得... 止... 滌... 業... 畢

江州大津松平之磯上觀佳硤石子
宝永四丁亥歲春乙州之因殷末
不得止滌業畢

及之小文

風花坊芭蕉

百穀九穀乃中にあを... 風花坊... 芭蕉... 及之小文... 乃... 乙... 州... 之... 因... 殷... 末... 不... 得... 止... 滌... 業... 畢

なほいふらんを一人又之施せ

いふ海もあはれ

そ海のまじりて人もあはれ

光を舟雅意をばけりあはれ海をばけりて
取もきくたはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

ふりのまほみしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて
あはれしとてあはれしとてあはれ海をばけりて

さるし無ありいさやのあはれもさるし無ありい

乾坤無住同行二人

り一知く様んせりを核のあはれ

しやうくあしをなす核のあはれ

致其多きはたせりしとわ皆排たたれも費れ

料もしおふはしりし合のやしわ双筆紙葉

至道たんとおふはしりし後に寄度たきいし

す核のしり力たしり此核をむにわたりし

りたすすもたたりわたりし事のしり

あつりしるるるるるるるるるるるるるるるる

しよのあはれもさるし無ありい

は法し佛もえたり花のあ

もあはれ

たつりしるるるるるるるるるるるるるるるる

之輪

多食果

麻味

龍のあはれ

空花しりし

やまらりし

龍門

計りのむやとすれはたすれあせり

酒のたはれんしは龍のむ

西河

あはれしりし

晴幅の鏡

本道又此の草の露の露の二十の草の露の

津小波田の川にまわりの

布川の鏡

ちね 雲面の鏡

胎尾ち入紙きたり

橋

橋のしるしをいふに

はるかにあそびに

あそびに

若は

下

吉野の草の露の露の

あそびに

あそびに

あそびに

あそびに

あそびに

あそびに

あそびに

あそびに

高野

あそびに

あそびに

おのれははるしき旅のゆくへに

文更

一ツ物いへばはるしき旅のゆくへに
吉野もくち平子もいへばはるしき

誰佛は日をもあつたはるしき旅のゆくへに
麻の子ともなはるしき旅のゆくへに
誰佛は日をもあつたはるしき旅のゆくへに

招提寺とてはるしき旅のゆくへに
難くともなはるしき旅のゆくへに
終つてはるしき旅のゆくへに

善哉一はるしき旅のゆくへに

おのれははるしき旅のゆくへに

麻の角とてはるしき旅のゆくへに

おのれははるしき旅のゆくへに

杜もはるしき旅のゆくへに

須戸

月もあつたはるしき旅のゆくへに

おのれははるしき旅のゆくへに

卯月申のえもはるしき旅のゆくへに
おのれははるしき旅のゆくへに
おのれははるしき旅のゆくへに
おのれははるしき旅のゆくへに

明石新記

朝音やとらなるとはまよとよのり

かたはこれ機がうらうらとよは酒のまゝおを
ひねりてしるはるる毎うかきさかたしん
かきし秋の七のさしうらうらとよは
出さおととらなるとはまよとよのり
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
かたはこれ機がうらうらとよは酒のまゝおを
ひねりてしるはるる毎うかきさかたしん
かきし秋の七のさしうらうらとよは
出さおととらなるとはまよとよのり
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる

所伏のうらま違なたはとらなるとはまよとよのり
種武たしとらなるとはまよとよのり
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
かたはこれ機がうらうらとよは酒のまゝおを
ひねりてしるはるる毎うかきさかたしん
かきし秋の七のさしうらうらとよは
出さおととらなるとはまよとよのり
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
かたはこれ機がうらうらとよは酒のまゝおを
ひねりてしるはるる毎うかきさかたしん
かきし秋の七のさしうらうらとよは
出さおととらなるとはまよとよのり
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる
いさうは酒のまゝおをひねりてしるはるる

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink. The text appears to be organized into several lines, with some words or phrases being more prominent than others. The overall appearance is that of an old, handwritten document.

